

ときにナスをもっていたら、よその倍だったことがあって喜んだものです。田は少し離れた九品仏に持っていました。あのあたりにはサギソウが自生していました、これは世田谷区の花です。

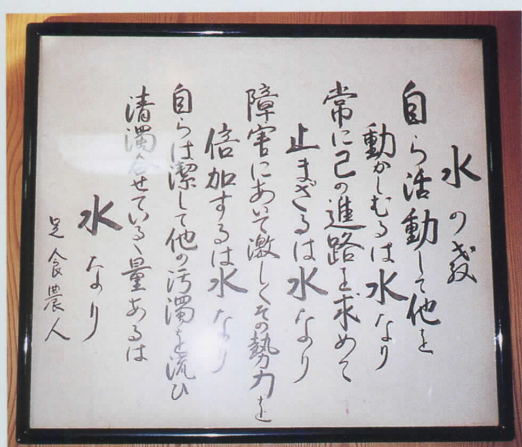
明治神宮の奉献活動では、宝船は足食会として出していました。四十六年に足食会がな

## 熱と真心の会

会長 大平博四

世田谷区等々力四―二三―五

信彌氏の遺訓は今なお後世の農業人を導く



大平夫妻

### 足食会会長の直弟子たち

大平信彌氏は野菜作りの第一人者といわれ、全国的に有名な精農家であった。

奉献をいたしております。

地域には古くからいるものがやらなくてはならないことが、たくさんあるます。玉川神社の総代もやっております。また、都内では見られない貴重な溪谷、等々力溪谷の自然を守ることに力をお貸してお役にたちたいと思います。

昭和初期から野菜作りに情熱をかけ、優れた野菜を作ること近隣農家の注目を集めていたことから、全国から指導を受けたいとする農業後継者たちが集まった。大平家に泊り込んで最先端の技術を学んだ研修生は、地元に戻り、地域の指導者として活躍している。その数、百数十人にのぼっている。

昭和三十年代中頃、全国に先駆けて農業資材として導入したビニールフィルムと、農薬の活用はそれまでの肥培管理を大きく変えた。しかし、先駆者としてのリスクは大きく、ビニールで密閉された中での有機リン剤等の農薬散布により健康な体は蝕まれていった。

昭和四十一年十月、胃に悪性のポリープが発見され、闘病生活を余儀なくされた。その後、体調は回復を見せていたが、四十三年の早春、病



は再発し、四月十二日、都市農業の発展と営農の確立に生涯を捧げた信彌氏は逝去され、研修生たちは悲しみに暮れた。

四十六年四月十三日の信彌氏の三回忌に足食会の目的は達成されたとして、会は解散するが、研修生の間から、だれ言うことなく「弟子たちの会」を結成することが持ち上がり、

街路樹、庭園樹などの剪定枝を堆肥として活用し、住宅地のご真ん中は有機農業の最適地となった



日ごろから、恩師の口癖であった「農業は熱と真心がなければいいものではない」の言葉をとって「熱と真心の会」と命名した。師への感謝を忘れることのないよう、新嘗祭には、自分たちが生産した作物を奉納することを決定した。今や二代目、三代目の代になったが、新嘗祭が近づくとも全国から博四氏のも



平成十三年の宝船

とに農産物が届けられる。

## 都会は有機農業の最適地

信彌氏の薫陶を間近に受けた博四氏も、農薬障害から体調を崩したが、若い分回復することができた。しかし、闘病生活で健康の重要さを改めて知った博四氏は、農業本来の原点に立ち返り、農薬と化学肥料を一切使わない先祖伝来の農法に回帰した。

東京は、有機農業の適地である。年間堆肥を一〇〇トン施すが、その原料となる庭木、庭園樹、街路樹等の剪定枝や廃材が無尽蔵にある。これを破碎して堆積して分解すれば極めて有効な堆肥となる。農薬は一切使わない。天敵は野鳥。虫退治にはガマガエルも養殖。これにより消費者から絶大な支持を得ることとなり、主婦を会員とした「若葉会」を結成、三〇〇世帯の消費者が管理や収穫作業に参加している。また、全国からの講演依頼に東奔西走。

五十七年にはアメリカで開催された「世界有機農業運動連盟」の主催する会議に日本を代表して出席し重責を果たした。全国からの研修希望者も後を絶たない。博四氏の教え子も含め「熱と真心の会」の会員は岩手から鹿児島まで全国で活躍している。